

12 ポット鉢付苗造林

1 試験担当者

造林部造林第1研究室：土井恭次

北海道支場造林研究室：林 敏太（昭和43年度より担当）

2 試験目的

造林事業における労働力の季節的偏りを平均化することは労働力確保の点から重要な問題である。貢献は下刈り事業に難点があったが、薬剤利用や機械化のため問題は解消され、逆に植付作業に問題が移行したようである。この解決方法の一つとして、植付時期の拡大をはかることが考えられる。ここでいう、ポット鉢付苗は、鉢付によって活着を容易にし、植付時期の拡大をはかるとするものである。

3 昭和42年度の経過とえられた結果

- (1) ポットには泥炭を主原料とするビートポットの他に、紙、プラスチック製コップ、スポンジ類など種々考えられる。ビートポット、紙製筒は従来から利用されているが、吸湿するとくずれ易くなるので、取扱い不便である。このため、プラスチックのコップを応用してみた。
- (2) そのための問題は、根の伸長を妨げないためのスリット、小孔のあけ方、土中では、腐敗消失することがないプラスチックが、根の生長を妨害するか否かが第一であり、昭和41年はこの点を主体に実験した。その結果、スリットより小孔がよく、また土中でもコップ上縁が腐質破碎され易くなり、根系の発達に支障がないと考えられる。
- (3) つぎに育苗法であるが、1コップ当たり播種粒数の調整と、灌水法が問題である。無発芽コップを軽くするためには、4～5本の稚苗成立コップが多くなり、結局間引の手間を必要とする。灌水は必須であり、自動灌水器を活用する必要がある。プラスチックポットは、土中に埋込み使用できる利点があるので、水分調節はビートポットより楽である。
- (4) 造林法では、地掘→下刈を一貫させた1年生苗造林のための除草法と下草の少ない造林地では夏季の乾燥防止法が重要である。また運搬用具の開発、作業班の編成、植付手順の確立も問題の一つである。

4 昭和43年度の試験計画

當林局署の共同試験として次の項目を実施し、苗木の成長、とくに根系発達の状況をチェックして作業方式を検討する。

- 1) プラスチックボットとビートボットによる育苗比較試験
- 2) 運搬用コンテナーの現地テスト
- 3) 時期別植栽試験の開始
- 4) 造林作業方式の案出

なおこんごの研究の進め方として

- (1) プラスチックボットは鉢付苗の生長を妨げる怖れはないので、育苗法と造林法の実用化試験への移行をはかる必要がある。
- (2) このためまず時期別植栽試験を行ない、造林時期の拡大をはかることが可能か否かを確かめる必要がある。
- (3) やや規模を大きくしたばあいの育苗および造林上の問題点を摘出することが必要である。